



「特集・インターネット天文台の新展開」に寄せて

佐藤 毅彦

〈熊本大学教育学部 〒860-8555 熊本県熊本市〉

e-mail: tsatoh@educ.kumamoto-u.ac.jp

遠隔操作により天体観測を行えるリモート望遠鏡は、いうまでもなく急速に発達したコンピューターとネットワーク技術の産物である。小望遠鏡が天体の自動導入に対応するようになったのが1984年（ビクセン製マイコンスカイセンサーの登場）、いまも多数のユーザーを持つミードLX200望遠鏡は1992年の発売であった。1999年には同じミードのETX-90望遠鏡が低価格コントローラーとの組み合わせで自動導入に対応するなど、かつての夢物語はまたたく間に一般ユーザーの手が届くものとなった。もちろん、公共天文台の大型望遠鏡においては、天体自動導入は当たり前の機能となっている。

ネットワーク経由での大型望遠鏡の操作や天体観察の黎明期は、曾我氏の文章に詳しい。ぐんま天文台の事例（衣笠氏の文章）もいわゆる大型望遠鏡によるものであるが、上述したアマチュア向け小口径望遠鏡をリモート化した施設もその数を増やしつつある（佐藤、高田氏、木村氏の文章）。ネットワーク上にライブ天体画像が初めて流れた日から10年を経ずして既に、曾我氏が指摘するように、リモート望遠鏡は珍しいものではなくなりつつある。すると問われるようになるのは、その利点（さまざまな見地から）とは何かである。

教育利用はリモート望遠鏡の真価を発揮しうる領域であろうし、本特集においても多くがその視点から論じている。イベント的な利用を脱し実際のカリキュラムに即した活用がなされる（衣笠氏）、海外サイトと恒常的な連携活用を行う（木村氏）など、リモート望遠鏡が学習ツールとして定着しつつあることを示しているようだ。普通学級にとどまらず、障害を持つ子供たちにも天体観測という夢を与える高田氏の実践も、リモート望遠鏡の優れた利用方法であるといえよう。一方で、肩肘をはらずに「見る楽しみ」に徹する峰山リモート望遠鏡の登場も嬉しい。本特集には寄稿されていないものの、ガンマ線バーストの残光を狙うRIBOTS望遠鏡のように、研究用に専念するのをもまた一つの方向性だ。産声を上げて間もないリモート望遠鏡であるから、柔軟な発想で使われてこそ成熟を遂げていくのだと思う。

折しも今年は火星の大接近、筆者も小望遠鏡で家人にその姿を見せる機会があった。しかし日頃見慣れていない人にとっては、大接近といえど、赤くキラキラ輝く火星面に模様を認めるのは簡単なことではない。「こう見えるはず」と提示したインターネット天文台からのライブ画像の方が、家人にははるかに見やすくリアリティを与えるものであったのである。「実物を見ることができるならそれがベストで、インターネット天文台の映像は代替の疑似体験」と信じる人は筆者を含め多いと思うが、実はそれが当てはまらないこともあるのだ。この新しいツールを活かすためには、上でも述べたように、柔軟な発想を持ち続けることが必要であろう。本特集が、さらに新しい視点を生み出し、リモート望遠鏡がその活躍の場を広げていく契機となることを期待したい。